

『情熱の航路』

『Now, Voyager』

(1942年公開)

※DVDレンタル・販売あり

ヒロインの人生のターニングポイントに
登場する3つの船と3人の男性

今回紹介する映画「情熱の航路」は、埋もれていたクルーズ映画だ。タイトルは邦題にも原題「NOW, VOYAGER」にも船を彷彿させる言葉が使われている。オープニングの背景にも船が大きく使われている。ヒロインの人生のターニングポイントに登場する船は3つも出てくる。しかし、日本においては、それほど有名な映画ではなかったようだ。

1942年にアメリカで製作・公開された古いモノクロ映画で、男が2本のタバコに火をつけ、片方をヒロインに渡すシーンに、当時のアメリカ女性たちは胸キュン。映画の中で最も模倣されたシーンの一つになった。アメリカでの配給収入は220万ドル、同年に製作・公開されたハンフリー・ボガート&イング

リッグ・バーグマン主演「カサブランカ」は95万ドルだったことから、アメリカでの人気ぶりがわかる。

前年12月に第二次世界大戦が勃発したばかりだったため、日本での公開は終戦翌年の1946年となる。この年には「カサブランカ」をはじめ、アカデミー賞7冠の「我が道を往く」などアメリカ映画が数多く公開されるほか、日本でも「グランドショウ1946年」が松竹で製作・公開。マキノ正博監督、高峰三枝子主演のミュージカル映画で、きらびやかな衣裳で歌い踊る姿は、戦後の苦しい生活の中を前向きに生き抜こうとする人々に、希望の光を与えただろう。また「東宝ニューフェイス」第1回生として三船敏郎が選ばれたのもこの年である。

今こそ船を
前に出し進め!

話は「情熱の航路」に戻ろう。この映画は、もしかしら戦後すぐの日本には重すぎる映画だったのかもしれない。というのは、男女の恋を描いたロマンチック映画ではあるけれど、真のテーマは、母親からの重圧による精神的抑制とその解放だからだ。

主人公は、ボストンの裕福なヴェール家に生まれた女性シャルロット。年老いた母親と二人で暮らしているミドルミスだ。太い眉毛、重苦しいメガネ、丈の長い保守的なスカート、太いヒールの頑丈な靴、強ばってビクビクした表情と仕草に、今にも心が壊れそうなギリギリの状態が表れている。その理由は母親との関係にあった。40代で授かった予定外の子供。初めての娘に嬉しさはあったはずと思うが、直後に夫を亡くしたこともあり、心配と不安が強くなった専制的な母親に厳しく育てられた。家に監禁されたような生活になっ



(イラスト：吉崎 英二郎)

リオデジャネイロ寄港に胸躍らすシャルロットを演じる34歳のベティ・デイビス

ホイットマンの詩を贈ることにした。「口に出さなければ、人生も土地も手に入らない。今こそ船を前に出し進め、探し見つけるがいい」

詩の言葉に背中を押され、彼女はニューヨーク発着ヨーロッパ&南米クルーズに乗る。自己喪失の原因となったのが船の旅ならば、自信を取り戻すのも船の旅、という作戦なのだろう。乗船しても最初は船室に引きこもりっぱなしの彼女だったが、勇気を出して寄港地ツアーに参加すべく、下船する。そこで出会った一人旅の男性、ジェリーと意気投合。リオデジャネイロで下船し、二人で

車を貸りて観光した帰りに事故に遭い、船に乗り遅れてしまう。彼は、次の寄港地ブエノスアイレスまで飛行機で行けば、次クルーズに再合流できること、それまでの5日間を、最後として一緒に過ごすことを提案する。なぜ最後なのか? その理由は彼には別れられない妻子がいるからで、そこが、ニューヨークで再会を誓う、クルーズ映画「めぐり逢い(1957年)」とは大きく違うところ。しかし、二人は偶然再会してしまう。

ナイル殺人事件にも出演の
ベティ・デイビスがヒロイン

監督のアーヴィング・ラパは、若き頃のオードリー・ヘプバーンがバレイリーナの端役で出ている「初恋(1952年)」の監督である。恋の相手ジェリー役は、「カサブランカ」で、イングリッド・バーグマンの夫役を演じたポール・ヘンリッドである。

ヒロインのシャルロットは、フイルムのファースト・レディと呼ばれ、アカデミー賞ノミネート11回という記録を誇り(現在の最多記録はメリル・ストリープの19回)、ハリウッド映画史上屈指の演技派女優ベ

ティ・デイビスである。リアン・ギッシュの妹を演じた「八月の鯨(1987年)」など、晩年も個性的な役で活躍した大女優だ。クルーズ映画「ナイル殺人事件(1978年)」で、付き添いの女性に言いたい放題し、真珠のネックレスにご執心だった、派手な金持ち婆さん役も彼女。身長160センチと小柄ながらエネルギーギッシュで、「私は同じ演技など一度たりともしたことはないから、怖いものなどはない」という名言も残っている。

肝心の船はというと、外観の全体映像が不鮮明で、どの船で撮影しているかは不明。だが、船室や甲板やラウンジなどの雰囲気はしっかり描かれていて、寄港地のリオデジャネイロの景色も合わせて、クルーズ気分が十分味わえるだろう。

今も大きな影響力のある

1940年代映画の一つ

ところで、この「情熱の航路」が最近少しだけ話題に上がっている。2017年2月に公開された、第二次大戦中のスパイ同士の恋愛を描いた、ロバート・ゼメキス監督最新作

たのは、20歳の頃に母親とともに旅したアフリカクルーズに原因がある。船内で働く新人無線技士の男性と逢いびきする現場を、母親と船長に見つけられてしまったのだ。それから十数年、もしかしたら二十数年の抑制された生活は、彼女の心を蝕んでいった。

義理の姉リサの紹介で、母親から離れ、精神科医の療養所で生活した彼女はわずか3ヶ月で回復の兆しを見せる。しかし、まだ自信と勇気がない彼女に、精神科医はウォールト・

ロマンティック・サスペンス映画「マリアンヌ」の衣装デザイナーが、作中登場する衣装は1940年代に作られた過去の3つの映画を参考にしていると言った。その筆頭に挙げられたのが「情熱の航路」だったのだ。主演ブラッド・ピットの妻を演じるマリオン・コティヤールの帽子姿は、確かに2つめのクルーズでのシャルロットの装いを彷彿させる。実は、ベティ・デイビスは「情熱の航路」の出演が決まると、原作小説を読んで役づくりに励むだけでなく、ヒロインの内面を映し出す衣装選びにも熱心で、多くのアイデアを衣装デザイナーに提案したという。知れば知るほど、何度でも見たくなる珠玉のクルーズ映画を紹介でき、嬉しく思っている。ボン・ボヤージュ誌コラム「クルーズとシネマ」に感謝!

(クルーズ映画ライター あいさわみき)

ボン・ボヤージュ「クルーズとシネマ」講座

講師・あいさわみき氏(クルーズ映画ライター)

ボン・ボヤージュに掲載中の「クルーズとシネマ」での裏話をライター本人が講演します。(参加申込はボン・ボヤージュ編集室)

☎03152941083(11時~17時)

【日程】5月18日(木曜日)
【時間】13時30分~14時30分
【参加費用】500円(当日払い)